

よさが感じられるといふ風なものに、兼好の心は惹かれるのである。第十段に、

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興あるものなれ。
よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきららかならねど、木だち物ふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うち有る調度も、昔おぼえてやすらかなること、心にくしと見ゆれ。

多くの工の心を盡して磨きたて、唐の、大和の、珍しくえならぬ調度も並べ置き、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき、又時の間の畑ともなりなんとぞ、うち見るより思はる。大方は、家居にこそ、とさまは推し量らるれ。

といふ條がある。住宅は、假りの此世に於ける一時的な住居であるとは思ふものの、よく調和がとれてゐて好ましい作り具合な家は、やはり興あるものであるといふ。かりの宿りとは思へどとは、例の無常觀に基づく考へ方であつて、此世は既に假りの世であり、その假りの世の中に住むほんの一時の住居であれば、如何なる住居であつても差支ないもの、むしろ雨露さへ凌ぎ得れ

ばそれ以上は望むべきでない、といふ風な考へである。理性から言ひ道理から言へば、正にその通りであるが、人情自然の發露に於ては、やはりつきづきしく有らまほしき家が、望ましいといふのである。ここに兼好の人間味がある。

次に、教養高き上品な人の住居と、當世風な成り上り者の住宅とを比較する。よき人が、のどやかに住みなしてゐる所は、さし入る月の光までも、一際しみじみとした色に見えるといふ。木立は物ふり、わざと手入れをしたのでもない庭の草木の自然さにも、趣きがあり、簀子や竹垣などの具合も趣味ふかく、家の中に一寸置かれてゐる調度類(身の廻りに用ひる道具の類)なども、古風で落ちついた感じのあるといふ風なのが、えも言はれず奥ゆかしいといふ。そこには、當世風な華麗な分子はなく、一見しては何の奇もないやうであるが、古雅でしつとりと落ちついた品位が、その家あるじの人柄のほどをゆかしく思はせるといふのである。それに反して、多くの工匠を使役して、あらん限りに磨き立てた豪華な邸宅。家具なども、唐のも日本のも、何れも得難い珍しいものを所せまく飾り立て、庭の草木までも、自然さを失つた作りさまに手を入れたものとなつてゐるやうな住宅、それは成り上り者などが好む所のものであるが、さうしたのを見ると、見る目も苦しく、わびしい氣持がするといふ。そして、直ぐに心にうかぶ感想は、かやうに豪華

な住居を作つてみた所で、假りの此世であれば、このまま何時までも住み長らへられるわけのものでもなく、又、一朝火災などに逢つたなら、時の間の烟と化してしまふだらう、といふやうな皮肉な感想であるといふ。あまりにもこれ見よがしのやり方に對しては、誰の心にも起つて来る反感、それを兼好は代辯してゐるのである。かやうに、よき人と、よからぬ人との住居を比較對照して、「大方は、家居にこそ、ことさまは推し測らるれ」といふ結語を下してゐる。住む家を見ただけで、その家のあるじの人格や心さまの高下は、十分に推知する事が出来るものである、との意である。

兼好は、かやうに、家居のさまと主の心さまとの間に、相通するもののある事をのべた後に、次のやうな面白い話を附加してゐる。

後徳大寺大臣の、寢殿に薦むさせじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、「薦の居たらんは、何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりこそ」とて、其後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられしに、まことや「烏のむれぬて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなん」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覺えしか。徳大寺にもいかなる故か

侍りけむ。

後徳大寺實定が、居宅の寢殿（正殿をいふ）に薦が盛んにやつて來るので、それを防ぐ爲に屋上に繩を張つた。これは恐らく鳴子代りのものであらう。それを西行法師が見て、「屋根に薦が居るといふ事など、何の不都合もない事だ。來たがつてゐる薦ならば來させてよいわけなのに、それを追拂ふ爲に繩を張るといふ一事で、大てい實定卿の心の底は知れた。物の情をわかまへぬ人である」といふわけで、それ以後は、實定の所へは參上しなくなつてしまつたといふのである。然るに、綾小路宮（龜山天皇の皇子、性惠法親王）の御住居の小坂殿の棟にも、曾て繩を引かれた事があつて、その際に兼好は西行の話を思ひ出したといふのである。所が、人の語る所によると、それは蛙が烏にとられるのを御覽になり、あはれと思召して、烏を追ふ爲に繩を張られたのである、といふ話であつたのでまことに有難い御思召であると感じた、といふ。それから考へると、後徳大寺實定が繩を張つたのにも、何か理由があつたのではあるまいか、と思はれる、と述べてゐる。家居の有様で家あるじの心事を推測する場合にも、單に直感的印象とその際の感じだけで判断すると、時によつては狂ふ事もある、といふ氣持であり、更に詳しく觀察したり調べたりすることも大切だといふのである。西行法師の一徹ぶりも面白いが、兼好のやうに深く心を

くばる行き方の方が、より多く世情に通じ人情に通じ得る。兩者の相違が自づと知られて、興味がある。

家居の様とあるじの心事との關係を、軽い皮肉とユーモアを交へて記して居るのは、有名な栗栖野の柑子の話である。第十一段に

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心ほそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるる笈の雫ならでは、つゆおとなふ物なし。閑迦棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

とある。前半には、人も通はぬ山里に、心細く住みなした草庵の有様を描き、かやうな所にも住めば住まれるものかといふほどに、浮世をはなれた住居の有様を描いてゐる。その描寫を通してその庵のあるじの道心の深さや、清閑の佗びを楽しんでゐるらしい事までも、自然に感じられて来るやうな描寫であるが、後半に到つて、たわわに實つた柑子の木の周圍を、きびしく圍つてゐる事を點出して、その主がこの柑子を惜しむ由をそれとなくほのめかし、「少し興ざめた感じがした」といひ、「この木が無かつたら、さぞかし良かつたらう」といふ評語を加へて、我々を微笑の中に入れて誘ひ入れる。前後照應の妙を盡した筆である。人間の住む所には何處にも浮世がある。兼好も木會で、「ここもまたうき世なりけりよそながら思ひしままの山里もがな」と詠じたといふ。兼好は、この庵のあるじに、「一種の幻滅を感じはしてゐるらしいが、それを非難してゐるを見るのは當らないと思ふ。世の中の俗人に比べては、たしかにこの主に好感をよせてゐる。その故にこそ、「この木なからましかば」の感想も生きて來るのである。

家居の有様について、調度のたくひも、その持ち主の性格を示すといふことは、第十段にも見えてゐるが、第八十一段には

一 屏風・障子などの繪も文字も、かたくななる筆樣して書きたるが、見にくきよりも、宿のあ
るじのつたなく覺ゆるなり。

大方、持てる調度にても、心劣りせらるる事は有りぬべし。さのみ良き物を持つべしとも

あらず。損ぜさらん爲とて、品なく見にくきさまに仕なし、珍しからんとて、用なき事ども仕添へ、わづらはしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくことごとしからず、費もなく、物がらの良きがよきなり。

と記してゐる。屏風や襖の繪や文字が、品位も趣もない筆つきで書かれてゐるのを見ると、書かれたものが見苦しいといふよりも、さうしたものを平氣で使用してゐる主人の趣味の低さが情なく思はれる、といふ。これもたしかに一理ある見方である。又、調度類が損じないやうにと、見苦しいカバーなどを用ひるやうなやり方や、又、特別に珍奇な趣向をこらして、一向役にも立たない飾りを作つて見たりするのは、或は吝嗇らしくも見え、或は見え妨らしく感じられて、その持ち主の人が心劣りせられるといふ。さうした實例は、我々も度々遭遇するので、兼好に同感を表したい所である。結局、調度は、流行を追はず、ひどく目立つ所のないもので、しかも價も高價なものでなく、品がらの良いものを持つのが良いといふ所へ落ちつく。平凡なもの考へ方と言へば言へるけれども、最も自然で安らかな趣味であると思ふ。

又、八十二段には、同じく調度類に言及して

「うすものの表紙は、疾く損するがわびしき」と人の言ひしに、頼阿が「羅は上下はづれ、螺

鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草子などの、おなじやうにもあらぬを、見にくしといへば、弘融僧都が、「物を必ず一具にととのへんとするは、つたなき者のする事なり。不具なるこそ良けれ」といひしも、いみじく覺えしなり。

と記してゐる。頼阿法師が、「薄絹の表紙は、古くなつてその上下に磨り切れが出来たり、青貝を箆め入れた巻軸などは、古くなつて貝などが所々剝落してゐるやうなのが、却つて趣きが深くて良いものだ」と述べたのは、その古びた味はひや、さびの付いた感じを愛する爲であつて、そこに高雅な氣品を認めたものであり、弘融僧都が、「物をすつかり一揃へに揃つたものになくしては氣がすまないといふのは、趣味の低劣な者のやり方であつて、不揃ひのままにまかせて置く方が、却つておくゆかしくて良いものである」と述べたのは、ありのままの自然さを保つ方が、新しく一揃へに作り直すよりも、素直で味はひのこまやかな點を愛した爲であると思ふ。兼好の時代には、既にかうした古色やさびやわびを愛重する趣味が生れてゐたものと思はれるが、それはやはり特に趣味教養の高い者にのみ味ははれて、一般には新しく華やかに美しいものが喜ばれて居たものと思はれる。その嗜好の相違が、やがてその人柄の相違を示すものとして、これ等の

話がここに採り上げられたのであらう。

(八) 世間智・人間智

——犀利なる心理探求——

兼好は廣い世間智を持つて、處世訓の數々を書きとどめた。「僧侶は浮世の事に無關心であるべきだ」といふ彼の持論からすると、兼好がかくも廣い世間智を持つてゐる事は、矛盾した事のやうにも見える。しかし、「浮世の事に無關心であれ」といふ場合は、彼の言葉は、當時の僧侶が名聞利達を求めて、權門勢家に入出して、俗人よりも一層に俗な振舞ひの多かつた者に對する嫌惡に發したものであるか、又は、田舎僧の如くに、世の噂や人の身の上について、物知り顔に金棒を引いて廻る連中を、厭はしく感じる所などから發したものである。兼好の持つてゐる人生智は、さうした種類のものとは選を異にする。彼は人生の機微に通じ、人情の隈々までも察知して、浮世の人心の動く有様を興深く眺め觀察してゐる。その點では傍觀者であり觀照家であつて、常に對象との間に相當の間隔を置いてゐるのであり、見る立場も、自由自在に轉變させ得る所に立つてゐるのである。さうした彼が、又犀利な人間心理の觀察家であつた事も、極めて自然である。

人生智は人間智であり、人間智は犀利な心理觀察智でもあるのだから。それで次に、兼好の心理觀察の面白さ深さを眺めてみる事としよう。

この方面で、何人もよく知つてゐる話は、第七十一段の「名を聞くより、やがて面影は推測らるる心地するを、見る時は、又かねて思ひつるままの顔したる人こそ無けれ。昔物語を聞きても、此の頃の人の家のそこほどにてぞ有りけむと覚え、人も、今見る人の中に思ひよそへらるるは、誰もかく覺ゆるにや。又、如何なる折ぞ、只今人の言ふ事も、目に見ゆる物も、我が心のうちも、かかる事のいつぞや有りしがと覺えて、何時とは思ひ出でねども、まさしく有りし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。といふ條である。これは、兼好に言はれて見れば、我々にも彼と同様に感じる事が確かに有る事を思ひ出すのであるが、それは我々に於ては、意識の面にちらりとあらはれても、直ぐに消え失せてしまつて、殆んどそれに注意を向ける事など無くて終る。それを兼好は實にあさやかに把握し、且つこれを書き留めてゐる。そして兼好以前にかやうな事を記した者もなく、彼以後にもかやうに簡明にその心理を描き得た者も無いのである。この點から見ても、兼好が如何に人間心理の觀察把握に於て敏感であつたかを知る事が出来ると思ふ。

(イ) 虚言の心理解剖——發生の心理——

前の例は、自己の心理觀察であるが、自らをかく觀察し得る程の心眼の開けた彼であるから、他を觀察する事は、尙一層に精しく且つ廣い。その好例は、彼が世上の虚言の種々相について下した觀察に於て見る事が出来る。第七十三段に

世に語り傳ふる事、まことはあいなきにや、多くは皆虚言なり。

あるにも過ぎて人は物を言ひなすに、まして年月過ぎ、境も隔りぬれば、言ひたきままに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて又定まりぬ。道々の物の上手のいみじき事など、頑なる人の其の道知らぬは、そぞろに神の如くに言へども、道知れる人は更に信も起さず、音に聞くと見る時とは、何事も變るものなり。

かつあらはるるをも願みず、口にまかせて言ひ散らすは、やがて浮きたることと聞ゆ。又、我も眞しからずは思ひながら、人の言ひしままに、鼻のほどおどめて言ふは、その人の虚言にはあらず。げにげにしく所々ちおほめき、よく知らぬよしして、さりながらつまづま合せて語る虚言は恐しきなり。我がため面目あるやうに言はれぬる虚言は、人いたく評はず。皆人の興する虚言は、ひとり「さもなかりしもの」と言はんも證なくて、聞き居たるほど

に、説人にさへなされて、いとど定まりぬべし。とにもかくにも、虚言多き世なり。たゞ常に有る珍しからぬ事のままに心得たらむ、よろづ違ふべからず。下さまの人の物語は、耳おどろく事のみ有り。よき人は、あやしき事を語らず。かくは言へど、佛神の奇特・權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、世俗の虚言をねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらしなど言ふも證なければ、おほかたは誠しくあひしらひて、偏に信ぜず。又、疑ひ嘲るべからず。

とあるのはその一つである。

兼好は先づ、世上に語り傳へてゐる事が、大ていは皆虚言であると述べ、その理由を、眞實を語る事は一向に興味が無い爲であらうか、と言ふ。これは虚言發生の心理的自然さを、りまく言ひ當てたものであると思ふ。眞實を眞實として傳へる事は、聞く方には興味はあつても、語る側には興味乏しい。それに輪をかけ柄をすけて、自分の創作を交へて語る時には、語る方にも興味不起り、聞く人もその話しぶりの生き生きとした點に、一層の感興をさへ感じる。これなどは悪意の毫もない虚言であるが、虚言が如何にして生れ、如何に人々に響くものであるかを、實によく穿つてゐると思ふ。

次に愛好は「あるにも過ぎて人は物を言ひなすに、まして年月過ぎ、境も隔たりぬれば、言ひたきままに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて又定まりぬ」といふ。虚言は元來、「有るにも過ぎて人は物を言ひなす」所から生れるのであるが、それが長い年月を経る中に、又、遠隔の地から傳へられて来る中に、口から口へと傳へられる度毎に、尾が付き緒がついて、雪達磨を轉がすやうに虚言の部分は増大して行く。そして果は、想像のまま言ひ度いままにその話は變形して傳へられることとなり、それが又、誰かの筆によつて書き留められると、今度は書いた物が確かな證據だといふわけで、いよいよそれは決定的なものになつてしまふ、といふのである。所謂歴史的事實として我々の疑はないでゐる事柄の中にも、かうした虚言は随分あるわけであつて、疑つてかかれば、文献なるものも、實は大して信用されない事になる。その話の内容が、道々の上手と稱せられた人々の、その一藝の上の妙技の物語りなどになると、その道の心得のないわけのわからぬ者などは、無暗やたらに、神わざのやうに言ふものである、といふ。名人の描いた馬が畫面から飛び出して庭の萩を食つたとか、名人の彫つた龍が夜になると動き出したとかいふ類であるが、さうした話は、その道知らぬ者には眞實らしく思はれても、その道の者になると、さすがに荒唐無稽な事は看破せられるもので、更に信じるものでないといふ。道に於ける修

行の體驗が、さうした俗説に惑はされないだけの見識を育成してゐるからである。しかし、世の中には、さうした道の人といふものは乏しく、百人中の九十九人までは、やはり虚言を信じて喜ぶ世の中だから、虚言は果しなく廣まり大きくなつて行く。従つて結局は、何事でも、耳に聞く所と、實際に見る所とは、非常に違つてゐるものであると心得てゐれば良いわけである。かやうな消息は現今に於ても度々出會する。日々の新聞紙上を賑はせてゐる記事も、大てい我々はそれを眞實であるかのやうに思つて讀み、我々の話題に上せてもゐるが、その記事の内容が、直接自己の見聞にふれた事柄であつたり、又自分に關係ある事柄であつたりする場合には、大てい相當の誤謬や脱漏や誇張などを、その記事の中に見つけるものであり、新聞記事などは出鱈目が多くて到底信用出来るものでない、と感じる。しかも、自分に關係のない記事であれば、同一日の新聞記事に於てさへ、やはりそれが事實の報道であるかの如き氣持で讀んでゐる、といふのが我々の日常生活であるのだから、人間の心理といふものは、考へて見ると滑稽なものでもある。虚言が廣まるのは、語る側にも聞く側にも、虚言によつて醸される所の面白味といふものを、愛好する心持が働いてゐる爲であるらしいのである。

次に愛好は、虚言の種々相について詳しく述べて行く。第一には、話してゐるそばからその嘘

がばれて行くのも一向にお構ひなく、口から出まかせにしやべり散らす所の虚言がある。こんなのは聞く者にも、直ぐにその嘘である事がわかるもので、比較的罪が軽い部類に属する。第二には、他人から聞かされた虚言について、自分自身では内心どうも眞實らしくも無いぞと感じてゐながらも、他に向つてそれを吹聴する時には、如何にも得意げに鼻うごめかしながら、聞いたままに語り出すといふ嘘がある。これは、その語り手の虚言とは言へないものであつて、謂はば虚言の電話線に過ぎないが、嘘はかうした徑路でどんどんと廣まつて行くわけである。第三の嘘はまことに性質の悪い虚言であつて、如何にも眞實を語るかのやうに、所々にわざと不明瞭な所をこしらへて語り、自分もはつきりと知らない事であるがと斷りながら、しかもちやんと話の辻褄の合ふやうに話し出す嘘である。さうした虚言は、聞き手の方では、まさか嘘ではあるまいとその話のたどたどしきで先づだまされ、本人がよくも知らないがと斷る言葉に油斷し、斷片的な話に、よく考へて見ると筋の通る所があるやうに仕組まれてゐる事から信じる氣持を起して、ついまんまと嘘に乗せられてしまふ。かうした虚言は最も恐ろしいものであるといふ。悪意から出た捏造の嘘などは、大てい此の流儀のものであるからである。第四に、虚言である事ははつきりわかつてゐても、その虚言が自分に取つて面目めんぼくのあるやうな虚言であると、聞いた當人は、強ひて

「それは嘘だ」とは主張しない、といふ。一度は揉み消すやうに言つても、内心ではその嘘が廣まつてくれる事を希望する心理が動くものだから、「いたくあらがはず」となるのである。實に人情の弱點をよくついた觀察である。第五は一同の者が、誰かの嘘話を聞いて大變に面白がつて居る際、自分はそれが虚言である事を十分に承知してはゐるが、自分一人が「そんな事ではなかつたのだ」とその虚言を暴露するのも氣の毒でもあり、一座の興を白けさせる事にもなるので、仕方なく沈黙を守つてゐると、皆の者からは、其の話の眞實性の證人と見なされるといふ風な結果となつて、その虚言は、眞實を傳へたものの如くに定まつてしまふ、といふ場合があげられてゐる。「誰某も其の席に居たのだ。若しこの話が嘘であるなら、誰某はその事を話し出す筈である。然るに彼は黙つて聞いてゐたのだ。だから、この話は決して嘘ではないのだ」といふ風なのが、「證人にさへなされ」といふに當る。これは、自分は虚言を言つたのではないが、その嘘の責任の一半を負はされる結果となり、甚だ迷惑な廻り合せである。しかし、氣の弱い者は、往々にかうした破目に陥る場合がある。これも中々鋭い觀察と言つて良い。

以上のやうに虚言の種々相を心理解剖の俎上にのせた上に、兼好は「ともかくにも、そらとど多き世なり」と言ふ。實に名言である。如何に虚言ばかりが世に行はれてゐるか。それは「眞

實が語られる事は非常に稀である」といふ事實に思ひをいたせば、誰でも首肯せざるを得ない所である。眞實を求める者にとつては、神經質に考へると、肌を粟を生じる程であるが、それが人生の現實相なのであるから、何とも仕方はないのである。それで、「ただ常にある珍しからぬ事のままに心得たらむ、よろづ違ふべからず」といふ對虚言觀も生れて來る。そして、人物人柄の上から概論すれば、下層階級で教養の乏しい者ほど、耳驚かすやうな虚言を言ひ散らすものが多く上層階級で、教養品位高い者になると、怪しいやうな事は言ひ觸れず事は少いといふ。これも如何にもその通りであつて、井戸端會議や金棒引きの語る所は、先づ全部が出鱈目の創作だと考へて良いものである。次で兼好は、「かくは言へど、佛神の奇特、權者(神や佛が此世に人間の姿となつて顯はれた者の意)の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず」と、ことわりを述べてゐる。神佛の奇特的な靈驗談や、權者(例へば聖徳太子は救世觀音の化身であるとか、行基は文殊菩薩の化身であるといふ如き)の傳記の神秘的な言ひ傳へなどをまでも、同様に取り扱つて、さのみ信じないで居るべきものだ、といふ譯ではない、といふのである。さうしたものは、この虚言論に於ては、その範圍外に置くといふのが、兼好の考である。兼好自身では、さうした神秘的靈驗談なども、さう大して信じないでゐたであらうと思はれるが、信じる人には信じさせて置く方が良

く、それを虚言だと主張してみた處で、何の益にも立たない事である事を良くわきまへてゐたと思はれる。別段に彼が僧侶であるから、佛や權者の奇談を擁護しようとしたり、擁護しなくてはならないと考へたものと見るには當らない。彼は、もうすこし自由な立場に立つてゐる人間である。

最後に兼好は、以上述べた所を綜合して、「世俗の虚言を、眞正直に信じて居るといふのも、馬鹿々々しい御人好しであるし、さうかと言つて、『まさか左様な事は無からう』と正面から否定してかかるといふのも、その人を不愉快がらせるだけで、何の詮もない事であるのだから、大體に於ては、虚言らしいと思つてゐても、眞實が話されてゐるものの如くにあしらつて置き、偏へに信じ込むとか、又、疑ひ嘲るやうな事とかは、しない方が良いものだ」と結論を下してゐる。自分の心さへたしかであれば、虚言を見ぬく事は容易であるが、それを顔に出したり口に言つたりするには及ばない、表面は世間並にあしらつて置くのが無難だといふのである。實に、世の中の酸いも甘いも汲み分けての捌き方だと感心させられるところである。

(ロ) 虚言の心理解剖——受け入れの心理——

兼好は第九十四段に於ては、同じく虚言に就いて述べてゐるが、その段では虚言を受け入れ

る側の心理を描き出してゐる。七十三段では、虚言を構へ出す側の心理を解剖して居るのだから、この兩段が相俟つて、兼好の虚言觀の全貌を示すわけとなる。百九十四段には、

達人の人を見る眼は、少しも誤るところ有るべからず。

例へば、或人の、世に虚言を構へ出して、人をはかる事あらむに、すなほに眞と思ひて、言ふままにはからるる人あり。あまりに深く信を起して、なほ煩はしく虚言を心得添ふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いささか覺束なく覺えて、頼むにもあらず頼ますもあらで、案じわたる人あり。又、まことしくは覺えねども、人の言ふ事なれば、さもあらんとてやみぬる人もあり。又さまざまに推して、心得たるよしして、賢けにうちうなづき、ほほ笑みてゐたれど、つやつや知らぬ人あり。又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほ誤もこそあれと、怪しむ人あり。又、異なる様もなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりとも言はず、覺束なからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又、この虚言の本意をはじめより心得て、少しもあざむかず、構へ出したる人と同じ心になりて、力を合する人あり。

愚者の中の戯だに、知りたる人の前にては、このままさまの得たる所、詞にても顔にても、

かくれなく知られぬべし。まして、明かならむ人の、惑へる我等を見んこと、掌の上の物を見んが如し。但し、かやうの推しはかりにて、佛法までをなすらへ言ふべきにはあらず。

と述べてゐる。この段では、冒頭の「達人の人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず」といふことについて、實例として虚言を受け入れる受け入れ方の相違をのべ、さうした相違を見ただけでも、其の人物の程度が知られるといふ事をのべたのであるが、我々の興味の焦點は、その實例の描き出し方の犀利な觀察に惹きつけられるのである。

或る人が、一つの虚言をこしらへ上げて、それで以て他を欺かうとする場合に、その虚言を聞かされる人物によつて、その受け入れ方に種々の相違があるといふ。そして、先づ第一には、極く素直に、その虚言をそのまま眞實だと思つて、言ふが儘にだまされてしまふ人があるといふ。これは好人物であるか、又は物事を深く考へない性質の人か、とにかく單純で無邪氣な人間といふべき部類に屬する。その次には、單に眞實だと思つて聞くといふだけに止まらないで、ひどく相手を信じ込んでしまひ、尙一層にその虚言に尾緒をつけて自分の創作を加へた虚言をこしらへ上げて、それを眞實だと合點してゐる連中があるといふ。かやうな事は一才考へると無い事のやうに思ふ人もあるかも知れないが、猜疑心や嫉妬心の強い人間が、憎いと思つてゐる誰かの事に

ついで、讒言的な嘘を持ち込まれたりなどする場合には、このやうな實例は、數限りなく頻發する。煽動的な虚言に乗せられて、有りもしなければ聞きもしないやうな事までも、事實あつたかのやうに思ひなしてしまふ如きものである。第三には、虚言を言はれても、一向に何とも思はず感ぜず、馬耳東風でゐる事もあるといふ。鈍感で無頓着な型の人物である。かうした人に逢つては、虚言は一向に其の効果を發揮し難い。第四には、少々は不安に感じて、信じる氣にもなれずさりとして全く信じないとまでも行かないで、果してどうだらうかと考へ込んでしまふ人間もあるといふ。これも世の中には相當に多い型であるが、「考へ込んでしまふ」といふ所に、少し危い所があり、手を變へ品をかへて持ち込まれると、遂にだまされてしまふ恐れのある種類である。第五には、どうも事實であるとは思はないが、世間がさう言つて居るといふのだから、そんな事もあるのかも知れない、といふ程度で聞いてゐる人間があるといふ。この種類の型が世の中に一番に多數を占めてゐるのであつて、直接に自分の身に降りかかつて來る火の粉でない限り、對岸の火災視して我關せずですまして置かうといふ連中である。第六には、虚言を告げられた際に、種々と心の中で考へて、その實相をつかみ得たやうな顔付をし、表面上は利巧らしげに首肯したり微笑を浮かべたりしてゐるものの、實際に於ては、何等その實相のつかめてゐない人間もゐると

いふ。甚だ興味の深い、且つ辛辣な觀察であつて、人間の虚榮心といふものが、こんな所にもあらはれるものかと、思はず微笑させられるものがある。利巧顔をする連中に多い型である。又第七には、いろいろと考へ込んで、ははあこれは實際はかくかくなのだらうと、大凡の見當はつけながら、それでも尙、もしも間違つてゐては大變だとばかりに、不審を残してゐる用心深い連中もあるといふ。これなどは比較的無難な部類に屬するものと言ひ得る。第八には、虚言を聞かされた際に、如何にも自分もそれを心得てゐたかのやうに振舞つて、「自分の見當をつけてゐたのと、少しも狂ひがない。やつぱりさうだつたか」と、横手を打つて笑ひ出すといふ風なのがあるといふ。相手の言葉が嘘か眞實かは問題でなくて、相手さへあれば自分を偉く吹聴しようといふ連中に多い型である。これも皮肉たつぷりな觀察であつて、實に面白い。第九としては、虚言を聞いた場合に、自分はその事情をちやんと心得てゐても、それを口には出さず、嘘だとはつきりわかかつて居る事に對しては、全く無關心な態度をとつて、事情を全く知らない者と同じやうな風にして通つて行く者もあるといふ。これなどは最も嘘の相手としては苦手なものであり、嘘を言ふ側に薄氣味悪く感じさせる聞き方で、恐らく兼好などの採つた態度であらうと思はれる。第十は、虚言を言ふ人の、何故さうした虚言を言はねばならないかといふわけを、最初からちやん

と心得て居て、嘘に對しては少しもこれを嘲笑せず、その虚言を構へ出した人間と同心して、虚言の傳播に加擔協力するといふ風な連中も居るものだといふ。最も性質の悪い人間であつて、虚言家よりも、悪い方にかけては役者が一枚うは手である。所謂悪魔型であつて、罪の深い連中である。

以上あげたやうな十ばかりの型を兼好はあげてゐるが、其の觀察の鋭さと、心理解剖の正確さとは、從來に比を見ない所である。兼好を心理探求者と稱する所以は、かやうな點にあるのである。そして、更に兼好は、「愚人の戯れの虚言に於てさへも、物のわかつた人の前では、この様々の人間の型は、その言葉つきからでも顔色からでも、隠れる所なく知れてしまふものだ」といひ、「況んや達人が人を見ぬく眼に於ては、少しも誤る所はなく、明智の人から見れば、我等愚人の心事などは、掌中の物を指す如く明白であらう」と結論を下してゐる。明智は慾心を離れ執着をはなれた所から生れる。慾心のある間は他人の心の底まで見ぬく事は出来るものではない。だまされ偽られるのは、何かの慾にからんでゐる爲であつて、自ら我が身を叱責する以外には、責任の持つて行き場は無いものである事と思ふべきである。

終りに附加してゐる「但し、かやうの推しはかりにて、佛法までをなすらへ言ふべきに非ず」と

いふのは、佛の衆生濟度の爲に使用せられた方便や權教は、この虚言の部類には入れてはならぬといふ斷り書きである。

(ハ) 人情に通じたる僧への尊敬

以上述べたやうに、兼好は人間の心理をとらへる事に於て甚だ鋭敏であり、それによつて人情の隈々までを知り分け汲み分けた粹法師であるから、他人を見る場合にも、さうした人物に對しては、好感を示してゐる。彼が悲田院の堯蓮上人を禮讃してゐるのは、その適例である。堯蓮上人の話は百四十一段に見えてゐるが、そこには

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のながしとかや、雙なき武者なり。故郷の人の來りて物語りすとて、「東人こそ、言ひつる事は頼まれる。都の人は、ことうけのみ良くて、實なし」と言ひしを、聖、「それはさこそ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情ある故に、人の言ふほどの事、けややく否びがたくて、よろづ言ひ放たず、心弱くことうけしつ。偽せんとは思はねども、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意通らぬ事多かるべし。東人は、我がかたなれど、實には心の色なく情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめより否と言ひて

止みぬ。にぎはひ豊なれば、人には頼まるるぞかし」とことわれ侍りしこそ、この聖、聲うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなる理、いとわきまへすもやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かる中に寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覺え侍りし。

と語られてゐる。兼好ははじめの中は、堯蓮が東國の武士あがりの僧であり、武藝に於て雙ぶ者なき者である由を聞き、又、言葉は關東訛りが抜けないうで、荒々しい所があることから、さう大した人物であると思はず、佛教の精しい道理などは、とてもわきまへる事も出来ない僧のやうに思つてゐたのであるが、この上人が、東國人と都人との氣立ての相違を物語つた話を聞いて、その理解の深さを感心し、非常におくゆかしく感じるに到つたといふのである。即ち上人の「やはらぎたる心」が兼好を感動させたのであつて、そのやはらぎたる心といふのは、畢竟、人情のくまぐま迄も察し、世情に深い理解を持つことに他ならないのである。

東國人が「東國人は、引受けてくれた事については頼みになるが、都の者は、口先きの請合ひだけは良くて、實際にそれを引きうけてやるといふ眞實性が無い」と、都人を嘲つた際に、堯蓮上人が、「さう思はれるのは一應尤もであるが、自分が長らく都に住んで、都人に親しく接して

見た所では、都人の心に眞實味が乏しいとは思はれない」といひ、その理由として、「都人は一體に氣立てがやさしく情も深いから、人から頼まれた事を、きつぱりと斷るに忍びない所があり、つい情に引かされて心弱く引き受ける。しかるに、都人は財力に於て乏しく、實行し度くても出来ない人が多い爲に、違約しようといふ腹は毛頭ないながら、自然に兼ての本意を通し得ない事が多くなるのである」と答へて、當時の窮迫した都人生活もたらした所の止むを得ない結果である事を釋明した。そして、東國人が信用出来るといふ理由は、彼等が人情を解し心にうるほひを持つ點に於て程度が低く、たゞ生一本な性格であるために、出来ないと思へば、頭から素氣なく斷つてしまふためであり、又、彼等には財力が豊富であるから、一旦引き受けた事を實行する段になつて困るやうな事がない爲である、と斷じたのである。結果のみから言へば、東國人は頼みになり、都人は頼みにならないといふ事は事實であるが、それが直ちに、都人が不眞實であり東國人が眞實である、といふ事にはならない。それには由つて來る理由があり事情がある。それを無視した所に東國人の單純さがあらはれ、東國人の考へ方を一應は肯定して、然る後に、ねんごろにその考の當を失してゐる事を告げる所に、堯蓮上人の「心やはらかさ」があらはれてゐる。關東武士上りの上人が、かやうに人情世情の機微にふれた言葉を以て故郷人をさすまでに到ら

れたのは、並々ならぬ心の修養によるものであり、その修養から考へれば、佛教の精しい道理についても十分な理解がある人であらう、と兼好は感じたのである。悲田院には多くの僧が居るにもかかはらず、推されて寺の住持となつてゐるといふのも、結局はこの人情に通じ人の心を思ひやる深さに原因があるのだ、と兼好は感じたといふのである。

(三) 人情をわきまへぬ僧への嫌悪

かくの如く悲田院の堯蓮上人を禮讃した兼好の筆は、直ちに轉じて、世捨人が案外に人情を知らないことへの非難に移つてゐる。即ち、百四十二段には、

世を捨てたる人の、よろづにするすみなるが、なべて絆多かる人の、よろづに諛ひ、望み深きを見て、無下に思ひくたすは僻事なり。その人の心になりて思へば、誠に愛しからん親のため妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり。されば、盗人を縛しめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢をす寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。

といふ條がある。自分が世を捨てて孤獨の生涯に入り、何の絆もなく、萬事にするすみ（無一物の意）な人間が、世俗の繁累の多い人々を見て、彼等が身を屈して他に阿諛したり、慾望をたくましくしたり、萬事に慾を先き立てて事を行ふ有様に對して、ひどくこれを輕蔑する傾向がある

が、それは間違つて居るといふのである。何故かといへば、それ等の世俗の人々の身になり心持になつて考へて見れば、愛しい可愛いと思ふ親や子の爲には、我身の恥などはかまつて居られなくなり、ひどく窮すれば、我身を罪人とする事さへも厭はないで、妻子を養ふが爲には盗みをさへも敢て仕兼ねまじいのである。それは恩愛の情に引かされての仕方であるのだから、妻子も眷屬も持たない世捨人などでは、その人々のあはれな心持はわかり難い。しかし、此の世の誰が好き好んで諛ひや盗みをする事があらう。何人でもそれは恥しく怖しくやり度くない事である。それを敢てやるといふことは、やらざるを得ない境地に追ひ詰められた悲しさである。その事情を考へれば、あはれみと同情をこそ感じるべきで、これを輕蔑する氣持などにはなれない筈である、といふのが兼好の考へである。物の表面だけを見て、淺薄な考へ方や批判をする者は、世の苦勞を知らない者であり、人情世情に疎い人間である。自分を標準にして他を律する者は、かやうな人々に多い。しかしそれは苦勞知らずの我が儘であつて、決して偉いのもなければ賞むべき事でもない。輕蔑すべきは世の人ではなくて、世の人を輕蔑する自分等の上に加へらるべきであらう。兼好の言葉はかやうな餘韻を残してゐるやうに思はれる。

八 兼好の審美觀

(一) 美的情趣の擴張と深化

兼好の趣味は甚だ廣く、各方面にわたつてゐるが、その中心をなすものと見るべきは、「何事も古き世のみぞしたはしき」と述べて居る如く、古代文化、就中平安時代の文化に對する憧憬追慕であつたと考へて良いかと思ふ。徒然草それ自體が、清少納言の枕草子に倣つて書かれてゐる事實が、最も雄辯にこれを語つてゐる。又、第十九段の、「折節の移り變ること、物ごとにあはれなれ」といふ冒頭を持つて四季折ふしの情趣を描いた文章なども、枕草子を換したものであつて、文中にも「いひつづければ、みな源氏物語・枕草子などに、こと古りにたれど、同じ事、又今更に言はじともあらず。おぼしき事言はぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず」などと自ら述べてもゐるのである。しかし、兼好の生きた時代が平安時代でない如く、彼の趣味も全然王朝的であ

るかといふと、さうばかりではない。平安時代的なるものを追慕しながらも、又、彼独自の個性的なるものの中にはつきりとあらはれてゐるのである。例へば第百三十七段の

花は盛りに、月はくまなきをのみ、見るものは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方しらぬも、なほあはれに情深し。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ、見所多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし」などはいふめる。

といひ、
萬の事も、始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものは。逢はでやみにし愛さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿に昔偲ぶこそ、色好むとは言はめ。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなくあはれなり。

といひ、（花の）さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨の内ならずとも思へるこそ、いと頼もしうをかじけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず。興するさまもなほさりなり。片田舎の人こそ、色いろこくはなはもて興ずれ。（花の）といふ如きは、兼好独自の個性的な角度からの見方であつて、平安時代の感じ方の類型をはなれたものであると言ひ得る。勿論、兼好の個性的な見方といつても、彼自身のみ見方といふのではなくて、何人でも同感する點に於ては、深く廣い趣味感に立脚したものであるが、かうした一見地を開いて、これを勇敢に宣言してゐる點に於ては、彼の獨創を認めねばならないと思ふのである。室町時代の歌僧正徹も、正徹物語の中に於て、（花の）花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかはと、兼好が書きたるやうなる心根こころねを持ちたるものは、世間に唯一人ならではなきなり。此の心こころは生得しやうとくにてあるものなり。久我か徳とく大寺だいじの諸大夫しよたふにてありしなり。……隨分の歌仙にて、頓阿・慶運・淨辨・兼好とて、その頃の四天王にてありしなり。つれづれ草は、清少納言が枕草子のやうなり。（花の）とのべて、かやうな廣く且つ深い物の見方の出来るものは、兼好唯一人であり、餘の者の企て及

ばない天稟てんれいなるものであると斷じてゐるのである。又、心敬僧都も、「ささめ言」の中に於て、不明體ふめいを論じてゐる條に、兼好法師が云、月花をば目にて見るものかは、雨の夜に思ひあかし、散りしほれたる木蔭きかげきて、すぎにし方を思ふこそ、と書き侍る、まことに艶えん深く覺かえ侍り。淨陽じやうやうの江に物の音やみ、月入て後この時聲なき、聲あるにすぐれたりと云。（花の）と述べて、兼好のかやうな見方は、誠に「艶」の極まりたるものであると稱讃してゐるのである。花は盛りに、月は隈なきを賞玩する事は、古代からの鑑賞の仕方であつて、最も美しい時機に物事を愛するのが、人情の自然である事は言ふまでもない。兼好も勿論これを肯定するものであつて、決して否定するほどにねぢく居ないのである。しかし、花が盛りを過ぎて散りしほれ、月が望もちを過ぎて後には、もはや見どころは無ないとして、これを愛でるに足りないものの如くに考へるのは、兼好のとらない所であつて、如何なる折にも、その情趣を汲み分け、味はひ樂たのむべきものとするのが、兼好の言ひ度い所である。又、直接に月や花やを目に見ないで、春ならば家の中にあつて咲く梅を思ひやり、月の夜は閨の中ながらも清光を思ふといふのも、これもやはり月花を愛でるものと言つて良く、雨に對して月の光を戀しく思ひ、家の中うちにたれこめた生活

を送つてゐて、春の行方を見ずに終るといふのも、やはり、あはれ深く情深きものと言ひ得るといふのである。これ等は、月や花を直接には見てゐないが、心の眼でこれを受するものであつてさうした心眼で物の情趣を思ひ見るといふことは、決して月花の直接の美景を否定するのではない。直接に見た美しさが、深く心の中に印象としてとどめられてゐるが故に、それを眼で見ると會を失つても、尙、印象の世界に於て其の風光を受し得るのである。結局、月花を受する心が非常に深まり、醇化せられて、然る後にこの境地が生れて來るのであつて、その鑑賞は幽玄の境地にまで進み得たものと言ひ得る。正徹がこれを天稟的な心用ひであると稱し、心敬が、饒の深ききはまれる心であると評したのも、この境地に到り得た心の深さを賞美したものである。本居宣長は玉勝間に於て、この段の兼好の思想を評して「人の心に逆ひたる後の世のさかしら心の作り風流にして、まことのみやび心にはあらず」とし、「すべて何事も、なべて世の人のま心にさかひて、異なるをよき事にするは、外國のならひのうつれるにて、心を作りかざる物と知るべし」と評してゐるが、それはたしかに曲解である。兼好は決して月花を眼にて見ることや、その最も美しきさを賞する事を、否定してゐるのではない。「花はさかりに月はくまなきをのみ、見るものかは」の「のみ」を注意すれば、その事は極めて明瞭である。さうした物の美しさは賞すべ

き事勿論であるが、そればかりが賞玩のすべてでない、といふのであるからである。従つて兼好の行き方は、「人の心に逆ひたる後の世のさかしら心の作り風流」では決してなく、「世の人のま心に逆ひて、異なることをよき事にする」ものでもない。むしろ、「まことのみやび心」は、此の境地にまで進められて、はじめて完成するものであると考へるべきであらう。源氏物語の評論に卓抜な見解を示し得た宣長が、これほどの事が理解されなかつたとは思はれないから、結局宣長の兼好評は、外國文化の排撃に急なるあまりに、いささか曲解的な態度を取つたものと、軽く見過してよいであらうと思ふ。

「萬の事も、始終こそをかしけれ」といふ物の見方も、宣長流の曲解をすれば、「世の人のま心に逆ひて、異なることをよき事にする」と見られなくもないであらう。しかし、物事の眞盛りには、見る事も感じる事も出来ない別種の趣が、その始や終には發見せられ、それは又、眞盛りの面白さに比べて少しも劣らぬ趣である事を發見し得たならば、それは物のうつくしさの大きいなる擴充であつて、藝術家のみの果し得る大きい貢獻と言つて良いと思ふ。例へば、男女の情が、單に逢ひ見ることといふのみにとどまるならば、それはあまりにも素朴である。然るに實際に於て、萬葉以後八代集の戀の歌を子細に鑑賞し、又は王朝時代の物語を注意深く読んで見れば、そ

こには實に夥しい戀の種々相が、各方面から描かれてゐる。それ等の作品に於て、「邊はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿に昔しのぶ」といふ如きは、枚擧に暇もないばかりに描かれ、それぞれに情趣深く表現せられてゐるのである。さうしたものを深く味はひ分ける時に、「物事の始めや終りにこそ、趣きの深いものがある」といふ事を感じ得る事は、決して、「世の人のま心に逆ひ」たるものではなく、「むしろ世の人の眞心の隈々までもよく知りわけたものといふべきであらう。」以上見て來た所を概括すると、兼好は、物の美の有り所や、又鑑賞の勘所を、從來の人々の常識以上に擴充して示す事に於て、物の趣致の無盡なる事を知らせようと志向したものと云ひ得るであらう。さうした美のあり所や勘所は、必ずしも兼好の發見によるものではない。平安時代以來の文藝に於て、様々の人々が、それぞれに既に描いて居る所である。しかし、それ等を通覽し綜合して、これを隨筆形式によつて、簡潔にしかも力強く、且つ興味深く説き進め得たといふ點に於ては、兼好の筆を俟たねばならなかつたのである。そして、兼好のかやうな物の見方が、正徹や心敬を感じさせたといふのも、兼好の説く所が、實は我が國民の教養ある階層の者に於ては誰でも同様に感じる所の共通的な美意識を、深く探つた結果であると言ひ得ると思ふ。

(二) 趣致の創造への暗示

——夜の物の映え——

兼好のかやうな趣味観は、第九十一段にも見られる。それも、當時の美的教養の乏しい者たちの考へ方に對して、更に眼界を廣くすべき事を示したものであつた。夜に入りて、物のはえなしといふ人、いと口惜し。萬の物のきら・かさり・色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝は、事をきおよづけたる姿にても有りなん。夜は、きららかに花やかなる裝束いとよし。人の氣色も、夜の火影ぞ、よきはよく、物言ひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。匂ひも物の音も、たま夜ぞ、よきはめでたき。さして異なる事なき夜、うち更けて參れる人の、消けなるさましたる、いとよし。若きども、心とどめて見る人は、時をも分かぬものなれば、殊に打解けぬべき折節ぞ、聲なくひきつくるはまほしき。よき男の日暮れてゆするし、女も夜更くる程にすべりのつ、鏡とりて、顔などつくりひて出づること、をかしけれ。といふのがそれである。

夜になると、晝ほどの明るさが無い。殊に往昔の照明装置は、燈火のほのかなものであるから薄明に近い。従つて、物の綺羅をつくしても、化粧をととのへても、その美しさは、晝に比べて映え映えしさが無くて、詮もないものだ、といふ考へ方にも、一面の眞理はたしかにある。しかし、それは一面的な物の見方であつて、その故に、夜は萬事つまらないといふ風に考へるのは、兼好の如き立場に立てば、口惜しき考へであると言はねばならない。夜に晝と同様の映え映えしさを求めても、それは求めるのが無理であつて、夜は夜としての特殊の映えを出す工夫をこらすのが、映えを求める人のなすべき事である。例へば、「晝は事そぎ（簡略な）およづけたる（地味な）姿にてもありなん。夜はきららかに花やかなる装束、いと良し」といふ如きである。明るい晝であれば、地味な服装でも、或る程度引き立つて見えるが、夜は地味なものは引立たない。どうしても、きらびやかな花やかなものでないと、燈火などの光では、美しさが目立たない。そのかほりに、燈火の光によつて、きらびやかな花やかなものが、くつきりと濃い陰影を伴つて、浮き彫りの如く見える美しさは、又到底晝では見る事の出来ない美しさがある。さうした美しさを出す工夫をすれば、「夜は物の映え無し」などと歎く必要は微塵もないわけである。否、むしろ「萬のものの、綺羅・飾り・色ふしも、夜のみこそめでたけれ」と、禮讃さへもすべきものであ

るといふ意見である。

「人のけしきも、夜の火影ぞ、よきは良く、物言ひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし」といふ。夜の火影では、人の様子も、良い人は一層によく見え、物いふ聲も、暗い中で聞いてゐる方が、たしなみ深い人の物言ひのおくゆかしさが、一層によく感じられる、といふ意である。これも、たしかに同感し得る所である。夜は他の物事に目移りする事が少く、心移りも従つて少く、ひたすらに注意が一所に集注せられるためである。音楽などの感銘でも、薫香などのかほりでも、たしかに夜の方が深味をおびて感じられるといふのも、我々の乏しい経験から考へても、如何にもと首肯せられる所である。

兼好はかやうに「夜の物の映え」を説いた。そして、常識的な一面的な物の見方しか出来ない者に對して、更に思ひをめぐらすべく蒙を啓いた。さうした立場からして、今度は、夜に於ける「映え」を生かすべきことを實例で以て説き出す。「さして異なる事なき夜、うち更けて參れる人の、清げなるさましたる、いとよし」といふのは、格別な行事が行はれる事もない夜、即ちさほど晴れがましくもない夜に、夜更けてから御所などに參上する者が、特に清らかな装束で參るのなどは、まことに良い」といふのであつて、これなどは「夜の映え」を如何なる時にも忘れない

嗜みを持つ人に對する稱美である。又、年の若い者たちの集りでは、敏感な人は、何時といふととなく相手を觀察してゐるものであるから、常に身だしなみをする必要があり、殊に氣をゆるして打とけてゐるやうな際には、尙一層にその心掛けが大切である、といふのは、年の若い者たちへの、親切な忠告であると言へるであらう。従つて、若く美しい男が、夜に入つて後にも、髪をくしけつて容儀をととのへ、女も夜更けてからそつと座をはづして、鏡に向つて御化粧をととのへなどして出て來るといふやうなのが、まことに優に感じられるものだといふのである。

(三) 王朝的情趣の追慕

徒然草の第四十三段・第四十四段・第四十五段には、王朝物語にあらはれて來るやうな場面の描寫がある。文品から言ふと、到底源氏物語や枕草子にはほひやかなのには及ばないが、兼好の王朝追慕趣味のよくうかがはれる作品である。第四十四段には、
春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥深く、木だち物古りて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆おろして淋しげなるに、東にむきて端戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、容貌清げなる男の、

年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなる様して、机の上に文をくりひろげて見わたたり。いかなる人なりけむ。たづねきかまほし。

とあり、第四十四段には

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の月影に色あひさだかならねど、艶かなる狩衣に、濃き指貫、いと故づきたるさまにて、ささやかなる童ひとりを具して、遙かなる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつつ分け行くほどに、笛をえならす吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、山のきはに惣門のあるうちに入りぬ。櫓に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しかじかの宮のおはします比にて、御佛事などさぶらふにや」といふ。

御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風にさそはれ來る空薫物の匂ひも、身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。心のままに茂れる秋の野らは、置き餘る露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往來も早き心地して、月の晴れ曇る事さだめ難し。とある。四十三段の話は、春の夕暮ののどやかな風光を背景とし、奥深く物古りた家の春閑寂寥

を描き出し、その中に、年若き美貌の男の、打ちとけてはゐるが心用意深いさまに、靜かに讀書してゐる光景を描いた。「いかなる人なりけむ、尋ねきかまほし」といふ最後の一句は、かやうな境涯の人に對して、思慕と敬意を拂つてゐる兼好の氣持を打ち出したものである。又、第四十四段は、あやしの竹の編戸の中から、故ありげな清らかな装ひの男が童を供に出かける姿を描き、田の中の細道を月光をあびながら、笛をえも言はず吹きすさぶ風流さを述べ、次でその男の到り着いた山際の第宅の有様に筆を進める。榻に立てられた車、御堂に參集する法師、寢殿から御堂へ通ふ女房の追風用意の心づかひ、薫つて來る空薫物の匂ひ等、一つとしてしめやかにあはれならぬものはない。かやうな情趣は殊に兼好の好む所であつて、一きは「夜のもの映え」を感じしめる所である。さうした有様を描いて、更に筆を轉じて、その周圍に展開する秋の夜のあはれを活寫し、情景と折ふしの人々の有様とが、いみじき調和の中に融け込んでゐる姿を描いた。紫式部日記の冒頭を思はせるやうな感じもある。兼好の趣味觀をよくあらはしてゐる。又、第五段には

北の屋かけに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人離れたる御堂の廊に、なみなみに

はあらずと見ゆる男、女と長押しにしりかけて物語するさまこそ、何事にかあらむ、つきすまじけれ、かぶし容貌など、いとよしと見えて、えもいはぬ匂ひの、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなど、はつれはつれ聞えたるもゆかし。

と、枕草子に見るやうな氣の利いたスケッチを描いてゐるし、第四百四段には、
荒れたる宿の人目なきに、女の憚る事ある頃にて、つれづれと籠り居たるを、或人とぶらひ給はむとて、夕月夜の覺束なき程に、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことごとしくとがむれば、げすの女出でて、「いづくよりぞ」といふに、やがて案内せさせて入り給ひぬ。心細げなる有様、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷にしばし立ち給へるを、もてしづめたる氣配の若やかなるして、「こなた」といふ人あれば、たてあけ所狭げなる遣戸よりぞ入り給ひぬる。

内のさまは、いたくすさまじからず。心にくく火はあなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、俄にしもあらぬ匂ひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よく閉してよ。雨もぞ降る。御車は門のしたに、御供の人はそこそこに」といへば、「今宵ぞやすき寢は寢べかめる」とうちささめくも、忍びたれど、ほどなければ、ほの開ゆ。

さて此の程のことどもこまやかにきこえ給ふに、夜ふかき鳥も鳴きぬ。來し方行末かけて、まめやかなる御物語に、この度は、鳥も花やかなる聲にうちしきれば、明けはなるるにやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、隙しろくなれば、忘れがたき事といひて、立ち出で給ふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしを思し出でて、桂の木の大なるが隠るるまで、今も見送り給ふとぞ。

と、王朝物語の一節にでもありさうな場面を描いてゐる。第五段には、霜夜の御堂の下長押に腰をおろして、しめやかに語る男女の光景であつて、これも有明月を背景にした一幅の畫であるが、「物のにほひのさとかをりたるこそをかしけれ」といふあたり、夜の物の映えがやさやかに示されてゐる。百四段のは、少し手の込んだ描寫であるが、中心は、荒れたる家に住む女の、しとやかな生活ぶりの中に見える、身だしなみや用心意のやさしさを、描き出すにあると見るべきであらう。「内のさまは、いたくすさまじからず」といつて、外觀の荒廢にも似ず、家の中はたしなみ深く住みなしてゐる様を先づ言ひ、「心にくく火はあなたにほのかなれども、物のきらなど見えて」と、夜の映えへの心くばりの程をいひ、「俄にしもあらぬにほひいとなつかしう」と、常に

空薫物のたしなみある様などを示したあたりには、兼好の趣味觀があらはれてゐるのを見る。

(四) 趣味的結婚論

兼好の趣味觀は、大體に於て平安時代思慕から生れて居る事は、以上述べた所から想像せられる所であるが、この趣味が、戀愛にとどまらないで、結婚といふものの上にも及ぼされてゐるのは、興味の深い所である。即ち第二百四十段には、

しのぶの浦の鹽の見るめも所せく、くらぶの山も守る人しげからんに、わりなく通はん心の色こそ、淺からずあはれと思ふ節々の、忘れがたき事も多からぬ。親はらから許して、ひたぶるに迎へ据ゑたらん、いとまばゆかりぬべし。

世にありわぶる女の、似げなき老法師、あやしの東人なりとも、賑ははしきにつきて、「さそふ水あらば」など言ふを、仲人、何方も心にくきさまに言ひなして、知られず知らぬ人を迎へもて來たらんあいなさよ。何事をか打ち出づる言の葉にせん。年月のつらさをも、分けこし端山の、なども相語らはんこそ、盡きせぬ言の葉にてもあらめ。

すべて餘所の人の取りまかなひたらん、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつ

けても、品下り、見にくく、年も長けなん男は、かくあやしき身のために、あたらし身を徒らになさんやとはと、人も心劣りせられ、我が身は、むかひ居たらんも影はづかしく覚えなん、いとこそあいなからめ。

梅の花かうばしき夜の臘月にたたすみ、御垣が原の露分け出でん有明の空も、わが身さまにしのぼるべくもなからん人は、たゞ色好まさらんには如かじ。

と記して居る。

茲では先づ、人目を忍び、闇路にまどひながら、止むに止まれぬ慕はしさに、苦しい思をしつとも相逢ふ戀にこそ、あはれ深き想ひ出も多し事を言ひ、それに比べて、親や兄弟などが許して妻として公けに迎へ取つた女に對しては、男たる者は、心恥しく面はゆい感じがするであらうとのべる。それは、後者の場合には、浪漫的な戀愛の雰圍氣がなくて、殺風景で無趣味な感じがあらうであらう。

次には、仲人結婚の味氣なさを述べる。世の中を暮しかねてゐる女などが、富有な相手であれば、不似合な坊さんでも、身分卑しい東男でも、迎へてくれる人さへあれば嫁ぎ度い、などといふのを、仲人が取りもつて、何の方にも奥ゆかしいやうな風な仲人口をきいて、今まで一度も知

り合つた事もない人を連れて來るなどといふのは、ほんとに味氣ないものであらうといひ、一體さうした妻を迎へた際に、何をきつかけに話しをはじめるか、話し出す言葉もあるまいと、白けたやうな初對面の場合を想像し、それに反して、相思ひ合つた仲であれば、今日までの日の辛さを語り、その障害をも押し分けて來た喜びなどを語り合ふ事が出來て、話す言葉も盡きないほどであらうといふ。まことに辛辣な物の言ひぶりであるが、たしかに人生の眞理にふれた面白い見方であると思ふ。

第三には、他所人が萬事を引きかまへて、取り持つてくれた夫妻では、お互に厭はしく無興に感じる事が多いであらうといひ、その具體的な一例として、迎へた女が美人であるやうな場合などだと、身分も卑しく顔も見にくい年たけた男の方は、「自分のやうな卑しい者の爲に、この美しい女が、折角の一生を徒らにしてしまふなどといふ事があるものか」と思ひ、女の心事の低さを思ひ下すといふやうな氣持にもなり、自分はさうした美人に亭主顔で對してゐる際などにはきまり悪く恥しい思ひもするであらう、何れにしても面白くもないに相違あるまいといふ。これも中々穿つた觀察であると思ふ。

以上の如くのべて、結局、「梅の花のかうばしい夜の臘月に、女のあたりに竹んだり、御垣が原

(禁中の御苑)の露を分けて、有明の月の頃に女の許から歸途につくといふやうな経験が、我が身の上の思ひ出にもないやうな者は、色を好まないに越した事はない」と結論してゐる。伊勢物語の主人公のやうなロマンスも持たない人間は、色戀などはしないが良いとの口吻である。趣味と情趣との雰圍氣につつまれてこそ、妻を持つ甲斐もあらうが、さうでない没趣味の者の、仲人を立てての結婚など、何の面白味もないものだと思つた所に、兼好の趣味感があざやかにあらはれてゐると思ふ。王朝時代式戀愛の讚美者が、彼自身の生きた武家時代の現實に對して、かやうな皮肉を並べたものと見るも亦面白い。

これと同じ立場で、「妻といふものこそ、男の持つまじき物なれ」と、妻を迎へ据ゑる事を否定したものと見て、第九十段の所論も面白い。曰く、

妻といふものこそ、男の持つまじき物なれ。「いつも獨り住みにて」など聞くこそ、心にくけれ。「誰がしが婿になりぬ」とも、又「如何なる女を取り据ゑて、相住む」など聞きつれば、無下に心劣りせらるるわざなり。異なる事なき女を、よしと思ひ定めてこそ添ひ居たらめと、いやしく推し測られ、よき女ならば、この男こそ、らうたくして吾が佛とまもり居たらめ、たとへばさばかりにこそ、と覺えぬべし。まして家のうちを行ひ治めたる女、いと口惜し。

子などいで来て、かしづき愛したる、心愛し。男なくなりて後、尼になりて年よりたるありさま、なき跡まであさまし。

いかなる女なりとも、明暮そひ見んには、いと心づきなく、憎かりなむ。女のためも中空にこそならめ。よそながら、時々通ひ住まむこそ、年月経ても絶えぬ仲らひとならめ。あからさまに来て、とまり居などせんは、めづらしかりぬべし。

といふのである。これは獨身禮讚の如くにも見えるが、獨身を禮讚してゐるのではなくて、定まつた妻を迎へ据ゑるとか、定まつた女の許に婿となつて居つととか、さうした事に對しての、趣味観上よりの否定なのである。それは、「よそながら時々通ひ住まんこそ、年月へても絶えぬ仲らひとならめ」といふ、平安時代式な戀愛を讚美する心が根柢となつてゐる。そして「如何なる女なりとも、明暮添ひ見んは、いと心づきなく憎かりなむ」と、夫婦生活から來る嫌惡感を、極度に恐れる氣持によつて、それが裏付けられてゐる。常に新しい氣持を持續して行く爲の用意とも見られ、慣れて刺戟を感じなくなる事への憎惡とも見られる。そして、かくいふ兼好の言葉にも、たしかに、極端ではあるが、人生の眞理が宿されてゐることを感じる。

中間の「異なる事なき女を……」以下は、「無下に心劣りせらるるわざなり」といふ、その心劣

りの具體例で、甚だ皮肉な描き方である。「格別に良くもない女を、大變よい女であるかのやうに、有難がつて一緒になつてゐるのだらう」とか、萬一その女が美人であるといふやうな場合であると、「あの亭主は、さだめて女房を可愛がつて、本尊様のやうに崇め奉つてゐるであらう。例へば、まづさし當りこんな程度の有難がりやうだらう」などと、つい皮肉な聯想もつかんで來るといふのである。そして次の條では、すつかり世話女房化した女を描いて、或は家政を切り盛りし、或は子供の世話に没頭してゐる女などは、誠に口惜しく心憂きものであるとのべてゐる。宛然、源氏物語の雨夜の品定めを想はせる口吻である。戀愛情趣第一主義で律する時には、美相なき家刀自かばとじに對しては、かく言はざるを得ないであらうが、こととしては少し極端な言ひぶりである。果して、江戸時代の儒者からは、甚だけしからぬ事であると、註釋の中に於て、兼好は非難せられてゐるのである。たゞし、世の中は廣いものであるから、兼好のこの言葉も、「我が意を得たり」と同感する人もあるであらうし、痛快であると溜飲を下げる者もあるであらう。

九 輕妙なる滑稽描寫の一面

——ユーモリスト兼好——

兼好は、時には嚴肅な宗教的教訓をのべ、時には實際的な處世の要訣を談じ、時には爲政者の驕傲に憤懣の色を示し、時には趣味觀に立つた戀愛論をも述べ、時には察しの良い浮世の苦勞人の姿を示しなど、千態萬様の姿をとつて我々に話しかけて來るが、彼には又、極めて親しみ深いユーモリストの一面もあつて、さうした話を告げる際の彼の筆は、輕妙に躍つて居る感じがある。御室の足鼎の話や、同じく御室の僧の紅葉狩の失敗談などには、滑稽の中にも、一つの教訓を寓して居る例であるが、次のやうなものになると、誠にすつきりとしたユーモア文學の味が深い。例へば、第二百九段の、

人の田を論ずる者、訴に負けて、嫉に「その田を刈りて取れ」とて、人を遣しけるに、先づ道すがらの田をさへ刈りもて行くを、「是は論じ給ふ所にあらず。如何にかくは」といひければ、刈る者ども、「その所とても刈るべき理なけれども、僻事せんとてまかるものなれ

ば、いづくをか刈らざらむ」とぞ言ひける。理いとをかしかりけり。の如きである。田地の所有争ひの訴訟に負けた者が、口惜しまぎれに、「あの田地の稻を刈り取つてしまへ」と、下人をやつて刈らせるといふのは、甚だ亂暴である。その命令をうけて出かけた連中が、途中の田の稻まで刈り取るといふのは、更に理不盡である。「これは訴訟を起された田でもないのに、何故そんな亂暴を働くのだ」と咎めるのは當然であるが、下人共の答がふるつたもので、「訴訟田だつて、刈り取つて良いといふ道理はないのだが、それを刈り取るといふやうな非道な事をしに行く我々だ、どこだつて刈らないわけはないさ」といふのである。「悪い事を意識してやるのだから、どうせ道理なんぞは無視してゐる。道理を無視する以上、どんな非道をやつたとて問題にはならない筈だ。それを問題にし度いなら、はじめから悪い事などさせないやうにするが良いだらう」といふやうな口吻である。そこに一理窟通つてゐる所、まことに面白い滑稽感が湧くのである。

又、第二百三十六段には、折角の感涙も無駄になつてしまつたといふ滑稽が描かれてゐる。これも罪のないユーモア文學の上々の作といひ得る。

丹波に出雲といふ所あり。大社をうつしてめでたく造れり。志太の何某とかや領る所なれば、秋の頃、聖海上人、その外も人数多さをひて、「いざ給へ、出雲拜みに。搦餅召させん」とて、具しもて行きたるに、各々拜みて、ゆゆしく信おこしたり。御前なる獅子狛犬、背きて後ざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ち様いと珍らし。深き故あらん」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり」と言へば、各々怪みて、「まことに他に異なりけり。都の苞に語らむなどいふに、上人なほゆかしがりて、大人しく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習あることに侍らむ。ちと承はらばや」と言はれければ、「その事に候。さがなき童どもの仕りける、奇怪に候ことなり」とて、さし寄りて、据ゑ直して往にはれば、上人の感涙いたづらになりけり。

この聖海上人は、まことに善人である。善良な人であるだけに、あらゆる物事の見方が善良であり、善意に解釋して感激する性格である。神前の獅子狛犬の据ゑ方が、他の神社と異つて、向ひ合はないで後向きになつて居るのを見して、先づ「これには何か深い由緒があるのだらう」と思ひ、その由緒をたしかめる前に、既に自己暗示にかかつて感心してしまつてゐるのである。だ

から、その同伴者に向つて、「諸君、この有難い事に気がつかないで居られるのか。これを見落すやうでは、折角参つた甲斐もないではないか」と、自分の發見を得意げに告げずには居られないのである。そして一同が「なるほどこれは他所とは違ふ。都へ歸つて土産話にするねうちがある」と感服すると、上人は大に嬉しくなり、早速に長老らしい神官をつかまへて、慇懃に由緒の説明を求める。「定めて習あることに侍らん」といひ、「ちと承らばや」といふ。その時の仔細らしい顔つきまでも想像せられるやうである。所が、この期待は、神官の無雑作な返答で、見事にひっくり返されてしまふ。「いたづらな子供等の仕わざでありまして、甚だけしからぬ事で……」と神官は自分等の監督不行届を恐縮するかのやうに、早速に狛犬を据ゑ直して、さつさと行つてしまつたのである。「折角の感涙が全く無駄になつてしまつた」と兼好は、甚だ巧妙に、その場の啞然たる空気を描いてゐるが、そのユーモアには我々もつり込まれて微笑せざるを得ないものがある。古註では、かやうな段にまでも教訓の意ありとして、「此の段は、あまりいらぬ所まで氣をつけだてをする教戒なり」とか、「信すべき事を信ぜぬは、まことの心にあらず。されど、信すべき理もなき事を、愚かに信心するは、をこがましき故に書ける戒めなり」とかのべてゐるが、兼好のこの筆致には、彼がユーモアを楽しみつつ書いてゐる氣息が生きて、感じられて、さう

した教戒の意などは、彼の念頭になかつたものと考へるが良いであらう。

第四十五段にも、愉快な話がある。

公世の二位の兄に、良覺僧正と聞えしは、極めて腹悪しき人なりけり。坊のかたはらに、大きな榎ありければ、人「榎の僧正」とぞいひける。この名然るべからずとて、かの木を切られにけり。その根のありければ、「切杭の僧正」といひけり。いよいよ腹立ちて、切杭を掘り捨てたりければ、その跡、大きな堀にてありければ、「掘池の僧正」とぞいひける。

といふのである。ここには、神経質な立腹屋の僧正と、それをからかひ氣味にはやし立てる口さがない民衆との面白い取り組みが描かれてゐる。兼好は先づ最も簡明に、この僧正の特質をとらへて、「極めて腹あしき人(腹を立て易い人間)なりけり」と述べた。そして以下、榎の僧正から堀池の僧正までの、命名のいはれを順次に描いてゐる。簡潔な筆の背後に、僧正の立腹と民衆のからかひとが、浮彫を見るやうに想像せられる。元來立腹屋といふものは、單純な性格で世間知らずな人間に多い。そして大てい腹を立てては損をしてゐる。そのために益々いららとして腹を立てる、といふ風になり易い。従つて、さうした立腹屋と、すれづからしの口さがなき京童との

取り組では、最初から僧正が負けてしまふ事は、きまりきつてゐる。けれども世間知らずの僧正にはそれがわからない。わからないものだから、榎を伐り倒したり、その伐り株を掘り起させたりして、それで禪名が防げるものやうに考へたのである。そして、そこが又、京童の乗する所となつてしまつて、益々出でて益々滑稽な結果となつてしまつたのである。實に滑稽である。これも古註には、異名などといふものは、さのみ氣にかけるべきものでないといふ戒めであるとか、又、立腹はよくない事への戒めであるとか註してゐる。さうした見方も成り立つであらうが、面白い笑話として眺める方が、やはりこの筆致から考へて正しいであらう。

以上のやうな愉快な笑語に、やゝ教訓的な意味の言葉添へたものとしては、五十二段に

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、或時思ひ立ちて、ただ一人徒歩より詣でけり。極樂寺・甲良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、「年ごろ思ひつる事、果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人毎に、山へ登りしは、何事か有りけむ。ゆかしかりしかど、神へ参ること本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞ言ひける。少しの事にも、先達はあらま

ほしき事なり。

といふ話がある。石清水八幡宮は男山の山頂に祭られて居る。極樂寺は神宮寺として、甲良神社は武内宿禰を祀つた宮として、何れも山麓にある。この仁和寺の法師は、極樂寺や甲良に参詣して、それで石清水を拜し得たつもりになつて、満足して歸つて來たのである。無智が禍した錯誤であつて、それだけでも一つの滑稽であるが、その隣人に對して言つた言葉によつて、尙一層に滑稽が強まつて來る。「聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ」といふのは、参詣し得たと思ふ得意さに、少々誇張して、眞實の有難さ以上に輪をかけて言つてゐる口吻がある。甲良や極樂寺では、さうした森嚴は浮ぶべくもないであらうし、「かばかりと心得てかへりにけり」といふ描寫からも、聞きしに過ぎて尊く感じたといふやうな氣配は見えないからである。そして、他の参詣人が皆山上へ登つたことに對して、「何事か有りけむ、ゆかしかりしかど、神へ参ること本意なれと思ひて、山までは見ず」と、暗に自分のみが眞の信心参りであつて、他人は遊山物見を兼ねたやうな参り方であるかの如き口吻をもらして、やゝ得意然たる所に到つて、我々の笑は一層に強まる。兼好の面白く思つてゐる所も、力を入れて描いてゐる處も、この錯誤を錯誤と氣づかずに得々としてゐる人物の滑稽さにある。そして、「少しの事にも先達はあらま

識り人)はあらまほしき事なり」といふ感想は、世の中の物事には、この仁和寺の僧のやうな錯誤に陥つて居るものが、相當に多い事をほのめかし、それとなく各自の反省を求めたものと見て良いであらう。

錯誤を錯誤と気づかないで、得意になつてゐる笑話としては、第八十八段の「道風筆の朗詠集」も有名である。

或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人「御相傳、浮けることには侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かむこと、時代や違ひ侍らん、覺束なくこそ」と言ひければ、「さ候へばこそ、世に有り難きものには侍りけれ」とて、いよいよ秘藏しけり。

道風は平安時代初期の有名な書家であり、和漢朗詠集を編撰した四條大納言公任は、平安時代の中期の有名な人である。それほどの事は、誰でも知つてゐる筈の事であるから、道風が書いた和漢朗詠集などといふものが、有り得よう筈もない事は、普通の常識のある人間ならば、わからなくてはならない筈である。況んや、珍しい骨董でも愛しようとするやうな人物に於てをやである。

あまりにも滑稽な錯誤であるが、それを指摘する人の詞は慇懃を極めてゐる。「御相傳について、は、よもや間違ひはありますまいと存じますが」といひ、「時代が違つては居りませんでせうか」といひ、「どうも私どもには睨に落ち兼ねまして」といふ。鄭重であればあるほどに、揶揄の氣味が深い。それに對する所藏者の答が又ふるつたもので、「それだからこそ、此の世に有り難いものなのです」といふ。どこまで没分曉漢であるか、一寸底がしれないが、恐らく指摘者の皮肉はこの男には通じなかつたものと見てよい。それは、「いよいよ秘藏しけり」といふ結語がその感を強めるからである。そして、兼好はこの話には格別な感想は述べてゐないが、この結尾の一語は、その代用をつとめるだけの含蓄を持つてゐるやうに思はれる。

又、第百二十五段には、次のやうな笑話が二つ記されてゐる。
人に後れて、四十九日の佛事に、或聖を請じ侍りしに、説法いみじくて、皆人涙を流しけり。
導師歸りて後、聽問の人ども、「いつよりも、殊に今日は尊く覺え侍りつる」と感じ合へりし返事に、或者のいはく、「何とも候へ。あれほど唐の狗に似候ひなん上は」と言ひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。

又、「人に酒をすすむるとて、己まづたべて、人に強ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たる者なり。一方に刃つきたるものなれば、もたぐる時、先づ我が頭を斬る故に、人をばえ斬らぬなり。己先づ酔ひて臥しなば、人はよも召さじ」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや。いとをかしかりき。

第一の話は、偶發の笑である。四十九日の中陰明けの佛事供養に、導師を招いて、一同が説法を聴いたのであるが、特に其の日の説法は上出来で、一同が感涙を流した。導師が、歸つた後で誰言ひ出すともなく、「今日は、何時よりも特に尊く感じたことだつた」と一同で感心し合つた際に、その中の或者が大に相槌を打つつもりで、「何といたしましても、あれほど唐の犬に似て居りますものはございませぬからぬ」と言ひ出したので、しんみりとしてゐた一座の空気が、突如として、實に滑稽な笑と變つてしまつたといふのである。唐犬は今日の狎であらうと言ふ説もあるが、獅子狎犬の狎犬と見るも差支はない。或は神社などの狎犬と見る方が、「尊く覺えた」といふ事との聯想上自然であるかとも思はれる。何れにしても、この少々頭の足りない人間の、相槌の打ちやうが、頗る頓珍漢である所に、この笑話の頂點がある。「さる導師のほめやうやはあるべき」といふ兼好の評語から察すると、この頭の足りない男は、導師の説法のうまさをも一同が譽

めた言葉を、顔つきの事だと感違ひをして居たらしい事が想像せられる。何れにしても、世の中には、かうした愛嬌者が時々居ることによつて、堅くるしさがほぐれる愉快さがある。まことに愉快な話である。

第二話は、比喩の取り方が、あまりにも面白く上手に出来過ぎて居て、しかも話す當人が大に得意である事に對して、軽い揶揄を兼好が洩らした例である。他人に酒を勧める際に、自分から飲んで人にすすめるのは、兩刃の劍(劍は兩刃で、刀は片刃である)で人を斬るやうなものだ、といふのがその比喩である。以下はその比喩の解説である。兩刃だから、振り上げる拍子に自分の頭を先づ切つてしまふ。だから相手を切る事が出来ない。自分が先づ酔ひつぶれてしまふ。だから相手を酔はせる事は出来ない。といふのがその解説である。至極尤もなやうであるし、恐らく誰もうまい譬へだと感心してゐたのであらう。それに對して、兼好は「實際に劍で斬り試みたのだらうか」といひ、「まことに愉快だつた」と評してゐる。軽い揶揄である。古註では、「この譬への、よく合ひたる事を、兼好のほめて言へるなり」とのべてゐるが、語氣から考へると、どうも譽めたものとは受取り難いものがある。

14575

徒然草に現はれて居る兼好の人生觀や處世觀や趣味論や道念論などは、大體以上述べた如きものであつて、その何れにも、廣くて且つ深い兼好の人生智が輝いて居り、人間味の豊かさが溢れて居るが、その中には、前述のやうな滑稽談が巧妙に交へられて、一層我々に親しさの感に惹き起させる。そして、それ等の様々の題目が、あたかも連歌一卷の進行のやうに、錯落として織り交へられ、ほのかな連想の糸で以て連ねられたり、気分や匂ひで以て連ねられたりしてゐる爲に讀む者をして、その變化の面白さに、飽く事を知らずに読み進まじめる巧妙さがある。その點では、徒然草のお手本となつた枕草子よりも、尙一層に上手に出来てゐると評して良い。又、枕草子の描く所は、尖鋭な觀察と巧妙な印象描寫が中心であつて、主として感覺的趣味的であるに對して、徒然草が、思想的方面や人生論方面にも涉り、道念を論じ道に處世觀を披瀝しなどして、人間訓の方面をも開拓し得て居るのも、徒然草の愛讀せられる一因となつて居る。私が今まで述べた處は、徒然草の内容を思想中心に整理して、その概略を傳へようとしたものであるから徒然草の持つ文段推移の面白さに觸れる事は出来なかつたのを残念に思ふ。讀者は、徒然草そのものについて、再び味讀せられんことを深く希望する。

徒然草鑑賞



KENKYUSHA

著者 能勢朝次

印刷者 小酒井五郎

印刷所 東京都新宿區神樂町一丁目二番地 研究社印刷所

發行所

研究社

東京都千代田區富士見町二丁目一番地

電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番
出版會社番號A一一〇一七番

定價金壹百圓

昭和二十年十一月五日 初版印刷
昭和二十年十一月十日 初版發行
昭和廿三年七月一日 第三版發行

914.45

N 97

W
Z

終